# 疑問、怒り、そして恐怖
## ー生徒指導主事研にてー

五月十八日、県教委主催の「南予教育事務所管内　小・中学校生徒指導主事研修会」が、西予市宇和町で開催された。管内の全小・中学校の生徒指導主事百八十人以上が集められ、欠席の場合には代員が求められる強制的なものであった。

開会行事は、南予教育事務所長のあいさつで始まった。所長は、「今日、勤務校からこの会場へ来た方はありますか。」と問いかけ、該当者に手を挙げさせた。二割を超える者が挙手した。

所長は、「思ったより多いですね。無理して学校に寄ることはありません。今日は出張なのですから、朝少しでもゆとりを持って自宅で過ごし、直接会場に来てください。」と語った。

私は、数年前の、教職員組合と教育事務所との交渉の様子を思い出していた。当時の教育事務所長が学校現場の多忙を認め、その解消が必要であるとの認識を示したことがあった。しかし、のは、私だけではなかったはずである。しかし、百八十人以上の参加者の誰一人として、それを指摘しようとはしない。

私は、「自宅から直接来る場合は、年休を取れという指示を受けていますよ。」と声を挙げた。恐らく所長は、「そういうときこそ、年休を有効に活用してください。」とかわすだろうと考えていた。

ところが所長の反応は、意外なものであった。「エッ、年休ですか。それは、誰が指示しているのですか。管理職と事務方ですか。・・・調べてみます。」そして、二度とこの事柄にはふれずに、話題を変えた。

つまり所長は、「例え五分間でも勤務時間に空白が生じる場合には年休を取れ。」という指示を知らなかったのである。

私たちは、校長会や事務室からのこういった指示を、当然県教委の方針であると認識し、「なんと世知辛いことになったものよ。」と感じながら、年休簿の記入を続けてきた。

長年管理主事を続け、南予地区の教育の最高責任者である所長がそれを知らないとは、どういうことだろう。

これだけ学校現場が多忙に喘いでいるというのに、管理主事という職務は、年休の扱いの変更や勤務における不合理など全く知らずにいても務まるということであろうか。

恐らく株を挙げようとしての発言だったのだろうが、自分の認識の浅さや「指導」の根拠の薄さを露呈する結果となった

一方、この研修会は、ほとんど活用されない資料を、年度初めの繁忙期に提出させることでも有名なのだが、この点は今年も改善されていなかった。

私の手元に資料の提出を指示した本研修会の文書が届いたのは、四月二十七日。資料の提出締め切りは、五月十四日。その間には、祝祭日が十日間あり、勤務日はわずかに七日間であった。

休憩時間の参加者の話題は、もっぱら「資料作成までの時間の無さ」「年度初めの慌ただしさに更に拍車をかける配慮の無さ」「前任の生徒指導主事が転出した後で、年度初めに『各校の取組』をまとめることの無理」などであった。やむを得ず、昨年末に提出した「生徒指導実践報告書」の焼き直しですませたレポートも目立った。

指示されたテーマは、「いじめ・不登校の解決」などであった。学校現場では、集団になじめない子や、発達障害に苦しむ子、困難を抱えた家庭などへの対応こそが課題になっている。我々が最も欲しいのは、子どものつぶやきや背景、教師の思いを具体的にたどり検討する事例研修だろう。

慌ただしい思いでまとめたレポートは、様々な取組項目をただ羅列した形となり、深い学びには活用できなかった。

「生徒指導の充実を図る」と言いながら役に立たず、現場に配慮しない官製研修が、子どもに向き合う時間を奪い、生徒指導の邪魔をしている。

違和感は、それだけではなかった。「中央研修（つくば）報告」を行った現職教諭。「生徒指導主事の役割」の講話を行った指導主事。生徒指導が目指す規範として、二人が期せずして挙げたのが、安岡正篤であった。

安岡は、「昭和最大の黒幕」「体制内右翼」と呼ばれた陽明学者である。戦前は、「日本精神の研究」「天子論及び官吏論」などを著し、「血盟団事件」や「二、二六事件」などにも関与したとされている。戦中は大東亜省顧問として戦争遂行の中核となった。戦後も自民党の歴代総理の「相談役」として権力をふるった人物である。

安岡が説いた天子を奉ずる日本精神の高揚が、最も尊いものとして彼らの頭にあるとしたら。

春の暖かな日差しを浴びながら、私の中に薄ら寒いものが流れていた。

（文責・河野修三副委員長）

愛教タイムス

発行所
愛媛県教職員組合
情報宣伝部
電話(089)941-6274
941-9667
編集発行人
松山市北持田町131
教育会館
愛媛県教職員組合

FAX(089) 946-2157
mail:kenkyoso@m08.alpha-net.ne.jp

No.1707

**教え子を再び戦場に送るな**